

《資料紹介》

内蒙古アル・ホルチン旗におけるゲセル伝説

藤井 真湖・娜仁图雅ⁱ

要旨

ゲセルは今日までチベット、モンゴルを中心に書承・口承を媒介として伝承されてきた巨大な伝承群である。この伝承の本源についてはチベット起源説や同源だが2つに分かれたとする説等々諸説あるが定説はみていない。日本でも翻訳をはじめ、各種の紹介、版本の系譜関係などの研究も出ているが、土地にまつわる伝説についての論考は拙論（藤井 2001）を除いて出ていない。本稿は、研究上の空白を埋める一助として、内蒙古自治区のアル・ホルチン旗で1980年代半ばに記録された当該地域の伝説を紹介するものである。このさいに、当該地域出身の娜仁图雅氏に、伝説に登場する地名の確認、原文の読解、および関連資料の補充の点で協力を得た。娜仁图雅氏は、幼少期にゲセルについての伝説を人々が話すのを漠然と覚えているとのことである。

1. はじめに

アル・ホルチン（阿鲁科尔沁）旗は中国内蒙古自治区の中部に位置する赤峰市の管轄下にある旗である。阿鲁科尔沁は、当該旗出身の温都日娜氏が『多民族混住地域における民族意識の再創造—モンゴル族と漢族の族際婚姻に関する社会学的研究—』（2007）において取り上げている地域のひとつである。氏は、そこにおいてモンゴル族と漢族の族際婚姻の状況を比較するために、地域の生業形態の違いを重視し、赤峰地域における4つの特色ある地域を対比の枠組みに取り上げたが、アル・ホルチンはその4つの調査地のひとつとなっている。その4つの調査地の選定された基準は、①都市化のシンボルとしての都市社会、②小都市社会、③農耕地域、④牧畜地域というものであったが、氏の調査した阿鲁科尔沁旗のBソムは、④の牧畜地域として選ばれたものである（温都日娜 2007：35－41）。

以上のことから推察されるように、アル・ホルチンというこの地域にゲセルの伝説が存在しているということは、モンゴルの「伝統的」と呼ばれる地域ならではの特徴といえる。ちなみに、アル・ホルチン旗が属する赤峰市（旧ジョーオド盟）の人口構成については統計資料を持ち合わせていないので現在の状況は把握できないものの、上記の温都日娜氏の調査時点である2004年の段階では、7旗、2県、3区から構成され、29の民族460万4000人が混住している（温都日娜 2007：25）。その内訳は、漢族が361万8744人（78.6%）、モンゴル

族が82万9512人(17.8%)、その他の民族が16万5744人(3.6%)である(同頁)。そして、アル・ホルチン旗の調査地があるBソムでは、モンゴル族の人口割合は92.3%、漢族は7.5%であるという(27頁)。これをみると、おおよそアル・ホルチンはモンゴル族が多数派を占める牧畜地域だということになる。

アル・ホルチン地域は、張穆の『蒙古遊牧記』の邦訳を参考にすると、遼時代には臨潢府の地であり、金代には大定府の北境となる。元代には遼王の分地となり、明の初年に、潢水の北、兀良哈の地に衛を置き、後に蒙古に入ったという(須佐 1939:135)。チンギス・ハーンの弟ハブト・ハサルから13代つたえ、圖美雅哈齊に至って、長子奎蒙克塔斯哈喇は、嫩河に遊牧し、嫩ホルチン(ノン・ホルチン)というようになり、次子の巴袞諾顔はフルンボイルに遊牧し、巴袞諾顔の長子坤都倫岱青が所部をアル・ホルチンというようになった(同頁)ⁱⁱ。

いずれにせよ、現在、“アル・ホルチン”の人々には独立した“アル・ホルチン”という集団意識が認められる。以下のゲセル伝説は、この“アル・ホルチン”地方で記録された11編の伝説の試訳である。この中には、幾つかの村名が出てくるが、村単位のアイデンティティはない。実際、行政改革により頻繁に村の名称が変化すること、また区画そのものにも変化が生じており、そうした単位が必ずしも安定していないので、そうした意識も醸成されにくいのであろう。

下記の原本は1986年に刊行されたものであるが、アル・ホルチン旗の11の伝説のほか、ジャロード旗の伝説も2つ入っている。アル・ホルチン旗の11の伝説の最後には、括弧にムンフウチルという人名が記載されているが、この人物については特に説明がない。伝説の4. や6. の末尾を見ると、誰それが我々に語ってくれたという叙述が見えるので、聴き手は複数いたことがわかる。この聴き手は伝説集という性格からして伝説の採集者が記録者であろうと推察されるが、翻訳の一端からでもうかがえるように、記録そのものはやや文学的な文体になっており、ある程度の編集がなされた観がある。

なお、下記の翻訳において留意したことは次のようなことである。(1) 訳語を付するのが難しい、あるいは妥当ではないと思われた場合には、カタカナで表記した後、丸括弧()に簡単な訳語を入れ、必要な場合には文末注を付したこと、(2) 原文の読解そのものができなかった場合には、カタカナで表記した後、ウイグル式蒙古文字の転写文字を後ろに付したこと、(3) 日本語で読む場合に自然な流れになるように、適宜[]に語句を補ったこと、(4) すでに紹介されたゲセルの伝説地が後続の伝説で登場する際に、既出であることを表示するために、ゴシック体にしたこと。(5) ゲセルの書承に大きな役割を果たしたと思われるいわゆる『北京七章本』に登場するゲセルの後の名前に下線をほどこしたこと。

1. アル・ホルチンの11のゲセル伝説

1. アルダハ aldaq-a の砂丘

地上が形をとりはじめ、人や動物が誕生する前に、10方角を安寧させた《ゲセル・ハン》という聖なる化身である人がこの世に生まれたという。[だが]これと一緒に、この世に無

秩序をもたらし人類を滅ぼさんとする 10 首のアルザク・ハル・マンガス（ゴツゴツした黒怪物）というものがこの世にできた。ゲセル・ボクド（聖なるゲセル）は黒い頭をもつすべての生き物を危難から救うため³³、アルザク・マンガスを成敗するために、ザン・シャンバル Jan Šambal の国から遣わされたという。そして、ある日のこと、ゲセル・ボクド（聖なるゲセル）はアルザク・マンガスを待ち伏せして成敗せんと追跡して追いつくと、アルザク・マンガスは策を弄して天地のどちらに行ったのかわからないように姿をくらましたという。

ボクド・ゲセル（聖なるゲセル）はすべてを見通す目で天地や陸地を眺めわたしたところ、神馬（栗毛の神馬）が 10 の尾のついたアルダハ（跳びネズミ）が飛び跳ねているのを見た。そこで、ゲセル・ハン（ゲセル王）はそれを見るやいなや、跳びネズミではなく、アルザク・マンガスだと判断し、馬を疾駆させて後を追いかけていき、今のローハ河に至ると、その跳びネズミはまたもや見えなくなってしまい、竜王の水晶でできた宮殿の底に姿を隠したという。

現在のバーリン旗、アル・ホルチン旗、ジャロード旗、ダルハン旗の真ん中を横切っているアルタイのマンハ（アルタイの砂丘）はすなわち、そのころにゲセル・ボクドがアルザク・マンガスの化身である跳びネズミを追いかけていった神馬の 4 つの蹄から立ち込めた砂塵が地上に積もって、現在の《アルタイのマンハ》ができたという。このようなアルタイのマンハ（アルタイの砂丘）のもともとの名は、アルダハイのマンハ（跳びネズミの砂丘）であったのが、後に、年月が経つうちに、アルタイのマンハ（アルタイの砂丘）と呼ばれるようになったということである。

2. ゲセルの山脊 (zo)

ゲセル・ハンは現在のバーリン地方の南端からアルザク・マンガスを追いかけて、アル・ホルチン旗、ジャロード旗、ダルハン旗を通して追いかけていき、見失ってしまった。[そこで]この世を隈なく捜し、世界を右回りに三周、左回りに三周し、崖や窪みを残らず探し、その痕跡を追って進んでいくと、**アルタイのマンハ**（1. のアルタイの砂丘）の山の南斜面の山脊を過ぎていったことから、この土地を《ゲセルの山脊》と名づけて、現在でも《ゲセルの山脊》と言っている。

3. ゲセルの湖

こうして、ゲセル・ボクドは生類にとって危険 [な存在] となったハル・マンガス（黒怪物）を見つけ出して成敗するために、駿馬に [乗って] 上体が傾くほどに疾駆していき、また《ゲセルの山脊》にやってきたところ、神馬が鞍を振り動かし、地面を引っ掻きはじめた。ゲセル・ボクドは宝のような駿馬が鞍を振り動かし、地面を引っ掻いているのを見て、たぶん喉が渴いているのだろうと駿馬を見やると、神馬の宝のような 4 つの蹄の下から水が湧き出て泉のようになった。ゲセル・ボクドは喉の渴きを癒した。

この神馬の宝のような 4 つの蹄から流れだした水は、後に人々に尽きることなく湧き出

る水をたたえた湖となって、今日《ゲセルの湖》と言っている。水も飲み物もなく《ゲセルの山脊》の広大な砂のなかにある《ゲセルの湖》は父なる天の加護、宝のような駿馬が足で掻いたことによってできたという素晴らしい伝説である。これは、ちょうど青い水晶たる世界（緑の草原の意）に〔白い〕水晶をはめ込んだように見え、遠近の人や動物の飲み水となって、五畜を太らせて^v、豊かな生活の源泉となり続けてきたのである。ホルチンの何人かの祖先から継承してきた《ゲセルの湖》という伝説はすなわちこれのことである。

4. ボルゾー・オボ

ボルゾー・オボというのは、アル・ホルチン旗の東端のハヒルの河（哈黒尔河）の左岸に広大ですっきりした美しい平原のなかに南北に向かって位置している楕円形の形をした、もっこりとしたオボである。西側及び南側には階段状になった岩がある。それが昔のままの姿であったころ、夏の季節に南側から見ると、ボルゾー・オボが周囲に緑の森林で覆われて、森の真ん中のオボの上にはいろいろな草が生え、色とりどりの花がやさしく咲き乱れ、両脇に沿ってハヒルの河が透き通るように光りながら音を立てて流れ、現在、トルコ石のようなオボは縁取りのように緑で囲まれ、水晶で縁取りした宝のようなオボがあった。ボルゾーの平原を通りすぎれば、オボの北側に砂丘、東側には山脊、南および西側にはぬかるんだ平原がある。旗の中心ではチャブガ・バルガスから東のほうに 120 ガザルの先に位置しているボルゾー村（宝力召苏木）に管轄されている^v。ボルゾー村という名前は、まさにこの《ボルゾー・オボ》の名前によって名づけられている。

昔々、ボルゾー・オボの周りの四方は、10、20 畝のところ、鬱蒼とした森、楡の古木で覆われていた。オボの中腹には 5 つの枝のある巨大な 3 つの楡の古木が上から垂れ下がっていた。また西側には連なった 3 つの木があったが、いくつかの木は 2 人がかりで抱え込んでも抱えきれないほどの巨大な大きさであったという。1933 年以来、オボ、シャンシ sangsi（不明）^{vi}の神木が壊れてなくなってしまった。昔は、年毎に旧暦の 6 月の 2 日に旗政府が知らせを出してザガスタイ寺のラマ僧や弟子たちが来て、家々がつどってハローン・ホショートイ・ホニ（羊）^{vii}の供え物を供え、相撲や競馬をする慣わしがあった。現在では、ボルゾー・オボの前の斜面にはたった一本立っている干からびた楡の木がオボを見守っている [だけである]。

ボルゾー・オボについての伝説といえば、[次の通りである。] 昔、ボクド・ゲセル・ハンが 10 首のアルザク・マンガスを成敗しようと闘い合ったときに、10 首のアルザク・マンガスは妖術の知恵をすべて使って隠れて逃げていくときに、ゲセルの愛する后であるアルロゴアをアルザク・マンガスに奪われた。ゲセルは怒りが天に達するほどになり、世界を右回りに三回回り、左周りに三回隈なく探したけれども、見つけることができなかった。[しかし] アルロゴア后はゲセル・ボクドに、「透き通った流れの川の岸辺にある暗い原生林のなかのもっこりしたお岩のオボのある場所で、アルザク・マンガスとお前と合わせてやろう。10 方角を救うゲセル、お前は早く私を救い、アルザク・マンガスを成敗して家財と民を災いなく永遠に幸せにしてください！」と夢を見させたという。それで、ボクド・ゲセルは夢から醒

めて、神馬に乗って、心眼で遠近の場所を見渡して、夢でみた場所を見つけ出し、馬で疾駆してやってきたところ、アルザク・マンガスはゲセル・ボクドの神馬の（立てた）砂を匂いでさとり、取る物も取り敢えずアルゴア后を背中に乗せて、そのまま西方に逃げていった。

ゲセル・ボクドはボルゾー・オボに登って見てみると、アルゴア后がやって来ないので、大いに不思議がって、よく見ると、アルザク・マンガスがなんとアルゴア后を背中に背負ってセルデン岩〔5. を参照〕を超えていくのが見えた。ゲセル・ボクドはそれを見て、この世を揺り動かして、妖怪や鬼を抹殺する神矢で後ろから照準を定めて射たところ[㊦]、セルデン岩〔5. を参照〕の南の頂がちょうど真っ二つに割れて欠けてしまったという。

ボルゾー・オボを過ぎると、ボクド・ゲセルは西南のところから越えて、西北に下りた駿馬の蹄の足跡、そしてゲセルの跡とあって、岩石に大きな足跡があった。また、ゲセルの立ち止まった場所、ボルゾー・オボの西側の岩には判読できない文字がちゃんと残っていることから文字が書かれた岩であり、ひとつの文字の層をはがすと、その下にはまた別の層ができて、際限のなく文字が書かれた岩であった。岩の上の文字は、チベット学僧たちがやってきてただ6字真言だけを読むことができただけで、他の横書き及び縦書きの文字は、モンゴル語、チベット語、満州語、漢語を知っている学者が何度も訪れて調べたが解説することはできなかったという。このことは退職した64歳の幹部であるゲンベル氏、オボを祀っていたバト老人、73歳のアルター氏、そして村長であるダワーニャンボーたちが私たちに教えてくれた。

5. セルデン岩の欠けた部分

セルデン岩を現在の人々は「欠け」とも呼んでいる。セルデン岩はアル・ホルチン旗のザガスタイ村（扎嘎斯台苏木）の中心から北に20ガザルのところに位置している。セルデン岩は、四方を砂丘に囲まれているので、その岩の頂はいくつもの砂丘の頂の上に、ギザギザに突き出ている。それゆえ、人々はそれを《セルデン岩》と言っているのである。セルデン岩には二つの頂があり、前方の頂は高く、四角い形で真ん中が穿たれている。セルデンの欠けた部分の上に登って東南の方角を見ると、**ボルゾー・オボ**が視界の端に霧のかかった中に見える。また北のほうを向けば、約10ガザルの端に岩山がひとつ聳えて見える。これをオンゴン山と言う。オンゴン山の頂にあるチョローン・オボ、セルデン山、**ボルゾー・オボ**（約束のオボ）の3つはちょうど糸が張られたように一直線上にはるか向こうに位置している。セルデン岩の頂が欠けたことについては、次のような伝説がある。

ゲセル・ハンはアルゴア后と夢で**ボルゾー・オボ**で会い、10首のアルズガル・マンガスを成敗しようと約束したところ〔これまで出てきたアルザガ・マンガスのことを指すらしい〕、アルズガル・マンガスはそれを悟り、セルデン岩の頂をつたって逃げた。すると、ゲセル・ボクドはそれを知って、**ボルゾー・オボ**の上から弓で射ったところ、セルデン岩を穿ったという。その日からセルデン岩が欠けたという。射った矢の宝のようなやじりは向こうに飛んでオンゴン山〔6. を参照〕の頂のなかにもぐりこんだという。セルデン岩の欠けた場所の下方にも、東南から西北に開いた入り口のある岩の洞窟がある。ここには、ノホイ・ショウオー

(犬)^{ix}が精神疾患にかかると入っていき、癒えると言われている。ダルハン旗のアルタン・シヨルゴール^x(現在はジャロードにある一原文中の注)は人の精神疾患を癒し、セルデン岩のシヨルゴールは犬の精神疾患を癒すという話もある。

6. オンゴン山のゲセルのオボ

ザガスタイ村(扎嘎斯台苏木)の中心から北**30**ガザルの先にトゥグレンタラ寺院 *tögürental-a* の北にある山をオンゴン山と言っている。昔、ボクド・ゲセルは**ボルゾー・オボ**からアルザク・マンガスを弓で射たところ、**セルデン岩**に命中して、宝のようなやじりが向こうに飛んでいって、この山の頂にはまり込んだという。

後の人々はゲセル・ボクドの恵みであると回想し、記録にとどめておこうと、山の一番高い頂に石を堆積して、オボを立てたという。オボの祀りは、山の裾野でトゥグレンタラ寺院のラマや弟子たちが執り行い、近隣の家がヤスタンやオボクの違いに関わらず^{xi}、モンゴル諸部落が合同して一年に一度旧暦**5月13日**の日に、ボクド・ゲセルの神馬を洗う日に丸々太った大きな羊の丸煮を捧げて^{xii}、ゲセル・ボクドの威光を蘇らせ、競馬をおこない、強さを競い合う相撲をする慣わしになっている。トゥグレンタラ寺院の旧跡にはアマルという老人僧がいて、オンゴン山のゲセルのオボの祭祀の読経をこの度私たちにチベット語で披露してくれた。

7. ウヘル・チョロー(牛石)

ザガスタイ村(扎嘎斯台苏木)の北**10**ガザルのところ、オンゴン・ホワの北に、イフ・ホワの南の鼻先に大きなウヘル・チョロー(牛石)がひとつあるのを人々は「ウヘル・チョロー」と呼んでおり^{xiii}、このあたりのアイル(村)をウヘル・チョローのアイル(村)と言うのであり、ここにある湖も「ウヘル・チョロー湖」と呼んでいるのは、昔からの言い伝えからきている。このウヘル・チョローの伝説は次の通りである。ボクド・ゲセル・ハンがアルズガル・マンガスを成敗するために、**ボルゾー・オボ**から太陽や月を射る宝のような神矢で**10**首のアルザク・マンガスを射たところ、セルデン山のひとときわ高い頂に命中して一角が欠けてしまい、やじりに当たって岩の石がそぎ落とされて風に飛ばされ、フンディー(2つの山の間の土地)、**3**つの谷の間をつたって、**10**ガザルの先に落ちたのがそれである。

8. ヨルの岩(イヌワシ岩)の欠けた部分

アル・ホルチン旗の**21**寺院のひとつとなっているゲンペイ寺院の周囲では、ヨルの岩という岩だらけのなかでもひとときわ高い頂がある。これは獍猛なヨル(イヌワシ)、ワシが常住し自分の可愛い子供の羽をしっかりと育てていた[場所である]。こうした岩の頂をヨルの岩(イヌワシ岩)あるいはヨルト(イヌワシのいるところ)と言っている。その山の南側にはキラキラと波状にさざめく透き通った流れの細い川がある。河の兩岸や山の尾根や鼻梁には色とりどりの花が季節ごとに咲き、節のある草、野生の果物、野生のプラムやバード・チェリーやハルガナが土壌を競い合うように育っている場所である。

昔々、この世を安寧にしたボクド・ゲセル・ハーンが地上をかき乱し、燃える火のように、国と人々に災いをもたらす **10** 首のガルゾー・マンガス（狂った怪物）を成敗して、この世を平安にした後に、正妻の後のアルゴア、恩ある天より加護をいただいた天神たちの娘 アジヨ・メルゲン 后を赤ちゃんとともに家に残して、アムド地方のチベットの国の危難を取り除くために出発したという。チベットやタングートを平定して、トゥリーン・エズン・ハン（チベット王のことらしい）の妻の娘である ログモゴア と恋人になり暮らしていた。それから **4**、**5** 年たって戻ろうとすると、アジヨ・メルゲン 后はオロンの山 [**10** を参照] の西の崖に赤ん坊の **2** 人の息子をつれて、**7** 匹の黒ヤギを下方の斜面に放牧して羊毛の糸を撚っていた。

ある日、ゲセル・メルゲンが気の荒い駿馬の勢いで雷神 アジヨ・メルゲン のそばにやってくると、アジヨ・メルゲン 后は雷のような怒りを抑えて、「**10** 方角を平定したゲセル・メルゲン、お前はアルザク・マンガスを成敗したというのか？この家や正妻である アルゴア 后、赤ちゃんの子供を忘れたというのか？お前は！今日という今日、お前が活着ているなら私は生きていないし、私が活着ているならお前は生きてはいない」と大声で怒鳴りつけ、「お前と私とで弓の勝負をして、ズルド^{xv}を互いに射あおう。幸運にも残るのがどちらかを父なる天、母なる大地が加護してくださいように」とボクド・ゲセルに「ヨルの岩の最も高い頂からこちらの私を矢で射抜け！お前の後に、私がお前を射抜こう」と言ったところ、ボクド・ゲセルは アジヨ・メルゲン 后の激しさを知っているので、何も言わなかった。ヨルの岩のところに飛んでいった。

ゲセル・メルゲンは「**100** ベールの先の心臓を」と言うとき、ズルドをひと連なりにしたままでハーン・ホルモスタ（ホルモスタ天神）からいただいた神矢の弦を力強く引いて、矢をつがえて放とうとすると、心が痛み、必死の アジヨ・メルゲン 后の方角を向けることはできずにいた。いったん約束した約束、口にした誓約なので、仕方なく、天空に祈りの手を合わせて、危害がないように祈りつつ、矢を放ったところ、神矢のやじりがシュッと鳴って一瞬のうちに アジヨ・メルゲン 后の親指のところを、親指に指貫をつけて撚っていた糸車の糸を切って、オロンの山 [**10** を参照] を射抜いて穴を開け、スパッと（矢が）飛んでいったという。

ゲセル・メルゲンの神矢のやじりはシュッと鳴ってやってきて、まさに心臓五臓には命中しなかったので、「今度は私の番だ」と言って、アジヨ・メルゲン は矢筒の神矢を取り出して、ヨルの岩のひときわ高い頂に立っていたゲセル・ボクドの心臓五臓をめがけて矢をつがえた。ゲセル・ボクドはヨルの岩の頂から心眼で アジヨ・メルゲン をじっと見つめて観察すると、微塵も手加減せずに神矢をまさに心臓に照準を当ててつがえていたので、魂も失せるほど怖れをなし、ヨルの岩の頂からツォグト山 [**9** を参照] の頂に走り去り、上ると、ヨルの岩が崩壊して西の肩のあたりが崩れ落ちて、スリットのように欠けた。

ヨルの岩の細く欠けた部分を見た人はみな、ゲセル・メルゲンが アジヨ・メルゲン 后と二人で約束をして矢を射あった伝説を話しあい、不思議がる。

9. ツォグト山の欠けた部分

ツォグト山は、昔、モンゴルの歴史の記録である『蒙古秘史』および『蒙古源流』に、ナ

イマンのタヤン・ハーンの8万の兵をハプト・ハサルやジェベのふたりが軍を動員して、ここにやってきて殲滅したということが書かれている。《ハチャル》、《ハヒル》の河が合わさって、ハヒル河の東岸のズルフ・ガツァーの3つの旗の北側にある、人が余り近づかない黒山の山並みのなかから目立って突き出ているツォグト山はまさに羊の群れの中にいる駱駝が入って立ち止まったような山となって高く聳えている。[このツォグト山は] 昔の伝説にはアジヨ・メルゲン^后の矢にあたって欠けてしまったヨルの岩からすこし西南の、20ガザルの先に存在している。

これに関する伝説は次の通りである。ゲセル・ボクドはヨルの岩の頂から、アジヨ・メルゲン^后の放った神矢から逃れて、ツォグト山の頂の上に、なんとか登ってくると、ヨルの岩が崩壊するようなガラガラという音がして天地がとどろき、火が燃え盛り続けて、ボクド・ゲセルのまさに後ろから追いかけてくると、ボクド・ゲセルは神馬を鞭打って、ツォグト山の絶壁の頂から駆け下りたところ、神馬は峻巖な岩のほうに力を出し切り、下方に下りるとき、滑ったことから、如意宝珠の蹄がツォグト山の中腹を、きこりがノミでうがってくぼみを作ったように溝ができた。ツォグト山の中腹にある岩や崖は長さが200メートル、幅が15メートル以上、深さが12メートル以上であり、数10ガザルの場所から崖のようになって黒々に見える。

10. オロンの山

アル・ホルチン旗のバヤンボラク（巴彥包勒格蘇木）村の中心からはるか東のほうに、アル・ホルチン、ジャロードという隣接する2つの旗をはさんで流れるダラルの河の東側にオロンの山といってひとつの山がある。これは、ゲセル・ボクドの後であるアジヨ・メルゲン^后が5匹の黒ヤギに草を食わせていた場所の山であると言う。アジヨ・メルゲン^后は10方角のボクド・ゲセル・ハンと賭けをし、矢を射あった場所なので《オロンの山》と名づけられたのがこれである（その山はジャロード旗にある一原文における注）^{xvi}。オロンの山の中腹には、西南方角に向いた洞窟があり、太陽や月の光がそこに差し込むという。これは、ボクド・ゲセルがアル・ホルチン旗のヨルの岩の頂からアジヨ・メルゲン^后を射たところ、神矢が突き刺して開いた痕にできた穴だという。

11. アルザク・ハル・マンガスを長持ちのような石で押しつぶしたこと

アル・ホルチン地方にはゲセル・ボクドについての伝説や物語が広く流布していた。10方角の支配者であるメルゲン・ゲセル・ハーンの神矢で射させたトゥディー山というのがアル・ホルチン地方にある。その欠けた部分は、横2尋、高さは人間ほどで、馬の蹄のような形をしている。ホント集落（坤都鎮）の北側、ハンスム村（罕蘇木蘇木）の南側にあり、エンゲルの泉、ボルトの峠、バヤン・ゴー、ウヘル・チョロー（牛石）岩などすべてゲセルの伝説で有名なものであり、とりわけウヘル・チョローにはゲセルの足跡、馬の足跡、犬の足跡として現在までずっと残っている。

昔々、ゲセル・ボクドはアルザク・ハル・マンガスと闘いをして、マンガスを追跡して進んでいくと、アル・ホルチンの北側のバヤンツァガン山に登って観察した。[すると] アルザク・ハル・マンガスはトゥディー山の頂に逃げていく。ちょうど向こうのほうにすばやく身をかかわして入ろうとしたところを、ゲセル・バートルは弓を準備し、矢をつがえて放つと、トゥディー山をサクッと射抜いた。[すると] 有害なマンガスの足に命中したけれども、転がり起きてまた逃げ出した。ゲセル・ボクドは軍を率いて、そのあとから見失わないで進んでいき、ウヘル・チョロー（牛石）岩の頂の上に至った。[そして] 馬から飛び降りて憎きマンガスをもういちどよく見ると、血痕を滴らせて、石の峠に近づいていた。ゲセル・ボクドは去勢馬に乗って、すばやく追跡し、岩山の鼻梁に壁のように立ちはだかる岩の西側にアルザク・マンガスをまさに追い詰めた。掴んだ武器を振りかざして、マンガスと闘うとき、エンゲルの泉の源に砂埃が巻き起こり、立ちはだかる岩にこだまが反響し、高山のくぼみに霞がたちこめて、清涼な泉が濁って、鳥獣がおののいた。[それでも彼らは] 昼夜の区別なしに引き続き闘いをつづけて、ゲセル・バートルは最終的にアルザク・ハル・マンガスを殺害し、トゥシレグの山の東、ヨルトの岩の北、バラトの峠の南に、アルザク・ハル・マンガスを、穴を掘って、長持ちのような石でふたをし、敵を成敗し、功名を得たという^{xvii}。

引用文献

- 《Aru-qorčin, jarud Geser-ün domoγ(nige)》 Geser-ün čubral bičig (1986) 内蒙古自治区社会科学院文学研究所・内蒙古自治区《格斯尔》工作领导小组办公室编、赤峰第一印刷厂印刷、pp.1 - 23.
 須佐嘉橘（訳）、張穆（著）（1939）『蒙古遊牧記』発行所 開明堂出版部
 藤井麻湖（2001）「中国青海省におけるゲセル伝説の地を訪ねて—土地に刻まれた伝説の現在—」『言語文化学会論集』第17号、pp.231 - 259.
 胡图仁嘎編（2005）『阿鲁科尔沁三百年』呼和浩特、内蒙古人民出版社
 温都日娜（2007）『多民族混住地域における民族意識の再創造—モンゴル族と漢族の族際婚に関する社会学的研究—』溪水社

注釈

- i 中央民族大学の博士課程に在籍しながら愛知淑徳大学大学院グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科にて研究生。阿鲁科尔沁旗の最南端紫达木苏木生まれ。
- ii ホルチンが“アル・ホルチン”と“ノン・ホルチン”に分岐した経緯については、『阿鲁科尔沁三百年』でも同様の説明がなされているが、その発端として次のようなことが書かれている（胡图仁嘎 2005:4）。すなわち、事の発端はウリヤンハイ万户の封建貴族たちがゴビの北で起こした反乱で、1524年ころに彼らの勢力はゴビの南側にも及び始めたのであるが、彼らの威嚇から逃れるために、ハサルの後裔であるホルチンのポロナイ・チ・ワンの第2子トモイ・ザヤーチ・ノヨン及びその長子フイムフータスハラ部落が次々にゴビの南に移動し、フイムフータスハラに所属する部落が主にノン河の流域に移動したため、彼らのほうは“ノン・ホルチン”と名づけられ、他方、トモイ・ザヤーチ・ノヨンの第2子バゴン・ノヨンに所属する部落はもとの場所に残されたため、“アル・ホルチン”となったという。“アル”という修飾語はこの時期より付くようになり、バゴン・ノヨンの息子フンドゥルン・タイジのころに自らの所属する部落を“アル・ホルチン”と名づけるようになったということである。
- iii 黒い頭をもつすべての生き物、とは、人間のことを指す。
- iv 五畜とは、羊、山羊、牛、馬、駱駝のことを指す。
- v チャプガ・バルガスは漢語名で天山。また、ガザルは長さの単位ではほぼ576 mに相当する。
- vi 樹齢の高い木のことであろうと思われる。
- vii ハローン・ホショート・ホニを直訳すると、「鼻面の熱い羊」となるが、「鼻面の熱い」は羊の形容語で実質的な意味はない。
- viii ホビルガン矢とは、神矢のようなニュアンスで用いられている。

- ix ノホイ・ショウオーは直訳すると犬と鳥だが、鳥を指すことはなく、犬のことを指す。
- x ショルゴールは「引き出し」を意味するが、ここでは、外側から見えない、岩の中の洞窟や隙間のことを指す。
- xi ヤスタンやオボクの違いに関わらずとは、「氏素性に関わらず」ほどの意で用いられている。
- xii この慣習の詳細は不明である。
- xiii とくに固有名詞ではなくとも、大きな石のことを、モンゴル族は、ウヘル・チョロー（牛石）と呼ぶとのことである。
- xiv ズルドとは、一般に、供犠のために家畜の頭、首、脾、心臓などを切断せずに、一続きのまま切り取ったものを言う。
- xv ベールは約 2 km。
- xvi オロンの山は *orun-u ayula* で「事件現場になった山」ほどの意。
- xvii 原文では“ダルハン・ツォル”を得たとある。“ダルハン・ツォル”とは、「税金などいろいろなことが免ぜられる権利」といった意味もあるが、モンゴルの伝承の多くの結末部には、主人公の勇者がダルハン・ツォルを得たことに触れられており、ひとつの定型句であり、ここで訳出したように、「功名を得た」という意味で解されている。